

# 人権なら

2017年9月1日

第81号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## フィールドワーク事前学習

### 平群、大和郡山、吉野地域を県民歴史講座で

第2回県民歴史講座が8月8日、同和問題関係史料センターであった。3人の研究者が今年度のフィールドワークで

訪れる地域の事前学習を兼ね、話をした  
= 写真。第1講は、大西誠



さんが平群地域－「十三峠を越えて」。第2講は、清水有紀さんが大和郡山地域－「大和郡山と浦上キリシタン」。第3講は、奥本武裕さんが吉野地域－「浄土真宗の展開と大和の地域社会－吉野地域を中心に」。

第1講。生駒谷フィールドワークでは近鉄東山駅－平群駅間を歩く。「平群」は古代の宮(皇居)のあった奈良盆地南東部からは北西対角線の端に位置する。「辺国」(端の国)と呼ばれ、のちに「平群」に変わったと考えられる。

竜田川に沿い、清滝街道(大阪・四条畷市から生駒を経て、斑鳩の辺りで奈良街道と合流)が走る。東西には、十三、鳴川、立石の峠越えなど、生駒・信貴山系をまたいで奈良と大阪を結ぶ街道が通る。十三峠は平安時代の歌人、在原業平が茶屋の娘に恋し通い詰めたといわれ、業平街道とも呼ばれる。

### 部落成立期と重なる大和国への真宗の展開

第2講。「キリシタンの弾圧と宗教政策」は日本近代史の中にどう位置づけられるのか。歴史的な流れや、浦上キリシタン弾圧(浦上崩れ)と明治政府の対応、大和郡山藩への「キリシタン流配」を取り上げ、説明。

「キリシタン流配」は明治政府の慌ただしい「富国強兵」政策を強力に押し進めていくなかでの「事件」。激しい弾圧を受け、多くの犠牲者を出したとされるが、その全容はまだ明らかになっていない、という。

第3講。県内にある被差別部落の寺院すべてが浄土真宗。大和国への真宗の展開は室町～戦国期と想定され、大和における部落の成立時期と重なる。そのため、真宗の展開過程の解明は重要だという。

浄土真宗史の概観、大和国の真宗事情、真宗寺院の割合や分布状況を説明したあと、吉野地域における真宗各門流の展開過程として、「蓮如『道の記』にみる吉野地方の真宗」(史料)を紹介した。

「百済門徒の展開」では、江戸時代、「百済衆」は東本願寺の箸尾教行寺に、「曾根衆」は西本願寺の曾根名称寺に、それぞれ発展。いずれも大和国最大の中本山となった。「吉野の真宗寺院と地域社会」の様子も説明。フィールドワークが楽しみとなった。

\*\*\*\*\*

## 石牟礼道子の世界を学ぶ

奈良人権部落解放研究所の「人権パートナー養成講座」が8月2日、県人権センターであった。島岡将・NPOコミュニケーション研究センター代表(写真)が「石牟礼道子の世界－原郷を求めて」と題し、水



俣病や「苦海浄土」などの作品を紹介したあと、映画「海霊(うなだま)の宮」上映と、シンポジウムがあった。桜井市在住の女性と伊藤満・解放同盟県連書記長が感想や思いを述べた。

石牟礼さんの作品「苦海浄土」との出会いは強烈で、この国と社会の現実に突き当たった感じがした。

## こども食堂ネットワーク発足

### 小地域福祉活動サミットで活動課題を討議

なら小地域福祉活動サミット2017が8月26日、県社会福祉総合センターであった＝写真。県社会福祉協議会が主催した。サミットでは、県こども食堂ネットワークの特別分科会を設定。



取り組み課題を出し合い、意見交換したあと、ネットワークを発足することから本法人も参加した。

この催しは毎年、開催。今回、第6回を数える。ことしは「広がれ、こども食堂の輪！ 全国ツアー in なら」としても開催。午前、湯浅誠・法政大学教授(社会活動家)が「こどもを真ん中においた地域共生の未来」と題し、基調講演した。

### 湯浅誠・法政大学教授が基調講演

こども食堂は全国で300カ所以上ある。高齢者などを含めた様々な形のこども食堂も生まれている。こども食堂は「気付きの拠点」と位置付けられ、子どもの状況に添い、抱える様々な課題に応えようと、たくさんの「裏メニュー」が作られている、と話した＝写真。



午後は4つの分散会で討議。特別分科会の奈良こども食堂ネットワーク設立記念シンポジウム「広がれ！こども食堂一食卓囲んで☆笑顔つながる 地域の居場所づくりへ」では、湯浅さんがコメンテーター、奈良市・大宮放課後こども教室 キッズおおみや、大和八木こども食堂、こども食堂いかるがの3団体代表がパネラーとして取り組み内容や活動課題を提起した。

シンポでは、地域との関係のあり方、財源問題、居場所確保のノウハウ、活動目的の明確化などについ

て話が交わされた。町役場の協働事業に公認されたものの、関係団体との連携ができない悩みも出た。ロードマップ作りや広報の重要性も指摘された。

湯浅さんは、人集め、保険(ケガや食中毒)の対応、広報、財源、安心が課題。回を重ねて積み上げていくこと。その際、地縁連携が大切だ、と語った。

発足式では、これまでの経過報告、発足宣言を読み上げ、県こども女性政策局長や生協連、県社会福祉協議会の役員、湯浅さんが、それぞれ立ち会った思いを述べた。このあと、全員で記念撮影し発足を確認し合った。

\*\*\*\*\*

## 楽しい子どもの居場所事業

### ハンバーガー作りやドッチボールに興じる

ひまわり「子どもの居場所」事業『お楽しみ会』が8月21日、三宅町人権センター(上但馬団地解放会館)であった。夏休みも終盤となったが、子どもたちは仲間たちと楽しいひとときを過ごした。



今回は、みんなで「ハンバーガー」作りに挑戦。ミンチをまぜ、プレートで焼きあげ、レタスとトマトやチーズをパンにはさみ、お好みで、マヨネーズやケチャップも。出来立てを口にはほお張った。しっかり肉の味のするハンバーガーができた。



美味しかった。4個、食べた子どももいた。



午後は、体育館で恒例の「ドッチボール」。小さな子どもも参加し、大粒の汗を流した。高校生・中学生・小学

生に幼児まで、元気いっぱい。渡辺哲久さんも子どもたちに交じり、体を動かしていた。

## 反差別の感性を膨らませて

### 山下力さんが三宅小学校研修会で話

三宅小学校先生たちの研修会が8月3日にあった。

山下力・NPOなら人権情報センター副理事長が講師に招かれ、話をした＝写真。昨年も、同小4年生の子どもたちに「私の誇りー三宅小が生んだ3人



のプロ野球選手」をテーマに話をしている。同小では児童数が減ってきて、教員の世代交代が進む。2、30代の先生が増え、6割程を占めるという。

山下さんは「自分たちがやってきたことや失敗など、見えてきたことや依然として分からないことなどを率直にお話し、一緒に考えていければ」と切り出した。部落解放運動に取り組むのが遅かったこと。きっかけは式下中学校の同和教育に熱心な先生を配転させようとして、教育長が「あっちの学校は同和地区を抱えてないので楽やで」と発言した事件で、その糾弾闘争に参加。「感動し、涙がこぼれた」と語った。

### 「人間誰も差別し差別されたいする存在」

昭和30年代は結婚差別をめぐり「硫酸事件」(1954年、部落出身女性Aさんは中学教員男性Bと結婚を前提に交際していた。Bは旧家で、一家の猛反対に遭い、Aさんと交際を続けながら、別の女性と結婚。Aさんは自殺用に持参した硫酸をBに掛けた事件)など、身内に「引き裂かれる」事象は、どこにでもあった。

もう1つは就職の問題。「南都銀行」の就職差別事件をきっかけに、70年には、「近畿統一応募用紙」が始まった。69年に上但馬支部を結成。その後、解放同盟県連専従となり、「糾弾屋」とも呼ばれた。だが、糾弾で「成功」したのは1つだけ、と「赤れんが事件」を取り上げた。早くして亡くなった弟の結婚をめぐる話や、娘との部落をめぐる議論の難しさなども語った。

次に、「内外の格差は解消した。しかし、部落差別は存在している」と具体的な状況を説明。「部落差別

をはじめ、一切の差別がない社会などは、どこにも存在しない」ことや、「部落民も差別する。人間誰も差別されたりする

存在」であると考えることが大切。「運動体は100年差別と抗い続



けてきたと豪語するが、女性をめぐって、朝鮮の人たちに対して、どう向き合ってきたのか。地域が障害者にとって居心地のいい地域だったのか。しっかり向き合うべきだ」と語った。

### 「子どもたちと一緒に考えてほしい」

この10数年来、様々な人たちと議論してきたが、「部落民とは誰のことか」「部落とはどこにあるのか」と言ったことに、私自身が明確な答えを持っていない。とりあえずは、「自分が部落民であることを引き受ける」こと、そして「異議申し立てをする」ことが、反差別の感性を膨らませていくことになる、と考えてきた。

「先生が、子どもたちから問われたときに、分からないこと、知らんことであっても、ぜひ一緒に考えてほしい」と述べ、話を締め括った。

\*\*\*\*\*

## 「やまゆい園集会」を総括

7・26「やまゆい園事件1周年」奈良集会「振り返りの会議」が8月23日、奈良市はぐくみセンターであった。「ひまわりの家」渡辺哲久さんが参加者の集約や集会に向けた街宣活動、会計報告などを行った。

そのあと、出席者が感想を述べ、議論。共通の意見は「障害種別を超えて多くの人に参加したことが驚き」。何よりも良かったのは「当事者の発言が多く出たこと」。それぞれが思っていることや、抱えてきたことなど、「言いたいこと」が言えた。生活や活動の現状、困難さや抱え込み方などの意見も出た。

実行委員会は今後も議論を継続。この奈良で「何が足りないのか」を共に考えていこう、とまとめた。



# 「清河への道」など熱唱

## 唄とギターの響きに酔いしれた新井英一ライブ

新井英一ライブが8月19日、三宅町文化ホールであつた＝写真。

新井さんは1950年、福岡県生まれ。朝鮮半島の血を引く。自らを「コリアン



ジャパニーズ」と呼ぶ。1979年、デビュー。1986年、父親の故郷、韓国・清河(チョンハー)を訪れる。自らのルーツと半生を歌い上げた『清河への道～48番』を作り、1995年にアルバムとして発表。第37回日本レコード大賞「アルバム大賞」を受賞した。

オープニングは「命の河」。<喜びも悲しみもひたすら乗り越えて 地図にない人の世の道を歩きましょう 嘆きの雨にも打たれましょう…。続いて、「父の国」「エイジャン・パラム」…。会場は唄とギターの響きに引き込まれる。「命の響き」「ああ、この国では」…。最後は「清河への道」。アンコールは「生まれてよかった」。

ギターの高橋望さんが作曲し、新井さんが歌詞を書

### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

米国では今、トランプ大統領の誕生で人種差別思想が息を吹き返している。極右のKKKなど、人種差別主義団体が公然と活動を展開。これをトランプは批判せず、擁護する。米国の歴史を正しく知れば、ありえないこと。誰もが人種差別に敏感な国だ。多数の人々が抗議の声を上げている。各界からも批判が続く。でも、少数とはいえ、露骨に差別言動をする連中が存在する。日本でも、だ。ネットでの書き込み、ヘイトデモを繰り返す。日本では、声を上げる人たちは米国と比べ、ケタ違いに少ない。差別は無条件に悪だ。反差別意識が稀薄な社会は、とても健全な社会とは言えない。

いた「ほたる」も聴かせた。途中、ゲストの山村宙載(ちゆうさい)さんが「帰郷」を熱唱した。12曲90分ほどのライブは、とてもいい出会いと胸に熱く迫るものがあった。



ライブは松田暢裕さんが企画、「ムジゲ・虹」(韓国朝鮮の勉強会)の仲間がスタッフとして協力した。

\*\*\*\*\*

## 映画「尹東柱の生涯」を観る

映画「空と風と星の詩人ー尹東柱(ユン・ドンジュ)の生涯」を7月末、大阪シネマート心斎橋で観た。

映画は尹東柱が1943年7月に治安維持法で逮捕。福岡刑務所に収監され、取り調べの場面から始まる。中学を卒業し、現在の延世大学に進学。「同人誌」を編集・発行。1941年12月に卒業。1942年、いとこの床夢奎(ソン・モンギユ)は京都大学に、尹東柱は立教大学に入学する。敗戦が色濃く、戦時体制もより厳しくなり同志社大学に転学。翌年、独立運動を主導した嫌疑で床夢奎(1945年3月獄死)が逮捕、帰郷しようとしていた尹東柱(1945年2月獄死)も逮捕される。



小説『智異山』(李炳注=イ・ビョンジュ著、松田暢祐・訳)の時代の一部を映像化したように感じ、「その時代と共に、そこに在った人々の熱や情念」とも出会えた。詩集『空と風と星と詩』も素敵だ。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター  
〒636-0223  
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1  
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833  
E-mail:info@nponara.or.jp  
http://www.nponara.or.jp/